

## 「日本の文化を知りたくなって」

中学3年 北澤茉依

「パナソニックセンター東京」(東京・有明)で10月18日から12月4日まで開催されている、「文化のちから」に行った。共同通信社が、2020年東京オリンピック・パラリンピックを前に、中高大・専門学校生を対象にしたボランティアジャーナリストを育てる講習会に参加するためだ。

記者を30年以上勤めたという講師から、ジャーナリストとして念頭においていること、記事を書くためのコツを聞いた。普段の生活にも活かされる話だった。その話を受け、「文化のちから」の会場へ行って取材をした。

母から講習会の話聞いたときに、オリンピックという言葉には興味が沸いたが、「文化のちから」に心は動かなかった。この講習会が無ければ、自ら行こうと思っていなかったに違いない。

会場入り口から、いかにも日本の伝統文化を展示しています、という雰囲気があった。もっと気楽なイベントの取材だったらと思った。しかし、少し歩いてみたら、自分の身近にあるものが文化だったのだと気付いた。和食がユネスコの文化遺産になったが、何気ない生活の中にたくさん日本の文化があったのだ。

会場では最新のデジタル技術を駆使した展示がされ、真っ白な着物に日本的な多様なデザインを映し出すことが出来たり、マイクに「なでしこ色」と言うと、ブース全体がなでしこ色にライティングされてなでしこの花が映し出されたり由来が見られたり、文化芸術を楽しく身体で感じる事が出来た。

その中でも私が最も興味を引いたのは「日本の紋」だった。何気なく見ていた模様には、すべて名前があって、市松、千鳥くらいは知っていたが、星は「銀星」、蝶は「光琳胡蝶」、梅の花は「痩せ唐花」、丸四つで「四つ星」、三角七つで「七つ繋ぎ鱗」など…。市松紋様は東京オリンピックのエンブレムにも使われているが、その由来は、「色の異なる正方形を交互に敷いた入替紋様。奈良時代に石畳、平安時代に霞と呼ばれ、江戸時代に歌舞伎役者の佐野川市松が袴に用いたことから『市松』と言われました」とあった。市松紋様の由来が佐野川市松…東京オリンピックのエンブレムで話題となった佐野研二郎氏の想いも、この市松紋様に織り込んであげて欲しいと少し思った。

4年後には、多くの外国人が日本の文化を学んでやってくる。ホスト国の私たちが自国の文化を知らないではいけない。今回の講習会のおかげで、私は日本がより好きになったし、誇らしく思えた。他の国には他の国の文化や良さがあるが、まずは自分の国の文化と良さを知り、伝えてみたい。もっと日本を知ってもらって、好きになってもらいたいと思った。取材し記事にすることこそ、知って伝える、私がしたいことだと思う。